

## 留学・研究計画書

氏 名 宮本 隆史	留学機関名 ジャワール・ハルラール・ネルー大学
留学先国名 インド	留学期間 西暦 2008 年 7 月 ~ 2010 年 6 月
研究テーマ 近代インドにおける受刑者処遇制度の形成と展開に関する歴史学的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>英領インドの受刑者処遇制度は、統治構造が異なる 3 つの領域において形成された。3 つの領域とは、インド亜大陸のイギリス直接統治領域と間接統治領域（藩王国）、そして海峡植民地（シンガポール、ペナン、マラッカ）やアンダマンなどの流刑植民地である。これら諸領域における処遇制度は、相互に影響を与え合い複雑な変化を遂げた。こうした、近代インドにおける受刑者処遇制度の、複雑に入り組んだ形成と展開の過程を明らかにすることが本研究の目的である。</p> <p>英領インドの受刑者処遇制度の具体的様相については、1990 年前後になって社会史的研究が散見されるようになり始めた。Yang (1987) や Arnold (1994) は、受刑者たちの日常的経験に焦点を当てており、彼らの方法はその後の研究の基調路線となった。これらの研究は、刑罰に関する欧米の社会史研究の影響を強く受けたものである。そうした欧米の研究は、先行する Radzinowicz (1948) などの法制史の蓄積を背景にしなが、社会史の方法を導入することによって、制度に関する新たな歴史解釈を行なった点が画期的なものであった。ところが、英領インドの刑罰史研究が現在直面している問題は、制度の形成と展開の過程を、未だ全体として描けない点にある。</p> <p>申請者は、制度形成と変化の過程を解明する作業がまず必要であると判断し、海峡植民地への流刑制度を中心に研究を行ってきた。これまで、植民地官僚たちが考える「適切な植民地経営」のヴィジョンが、監獄の制度設計に際して決定的に重要な役割を果たしたことを明らかにした。19 世紀前半、人口過少であった海峡植民地の経営は、森林開拓から始める必要があり、流刑囚たちは安価な労働力として期待され、監獄制度もその目的に見合うように設計されたのであった。</p> <p>この流刑制度の研究に加え、今後は流刑囚送り出し地であるインド亜大陸における刑罰制度の形成と展開を明らかにしていく計画である。具体的には、インド近代史研究の中心地のひとつ、ジャワール・ハルラール・ネルー大学の歴史学科に拠点を置きながら、英領直接統治領域の個別の監獄に関する史資料を網羅的に調査する。こうした手書き史料は未公開であり、インド国立文書館、インド国立図書館および西ベンガル州立文書館などで長期の文献調査をする必要がある。さらに、申請者のウルドゥー語読解能力を活かし、19 世紀の行政文書がウルドゥー語で書かれていたハイダラーバード藩王国における監獄制度について、史資料調査を行なう計画である。</p> <p>こうしてインド亜大陸の監獄制度と、流刑制度との関係を解明することによって、近代インドの受刑者処遇制度についての全体像を得ることが可能になる。これは、刑罰の歴史研究に新たな知見をもたらすという学術的意味を持つ。また、近代に生成したインドの受刑者処遇制度とは、現代インドの同様の制度の原型である。その来歴についての知識は、今後の当該地域の受刑者処遇制度のあり方を模索する上で重要なヒントを提供するという社会的意義をも有する。</p>	

# 成果報告書

記入日 2010年 3月 31日

氏名 宮本 隆史	留学先国名 インド	所属機関 発展途上社会研究所、デリー
研究テーマ：近代インドにおける受刑者処遇制度の形成と展開に関する歴史学的研究		
留学期間： 2008年 10月 ～ 2010年 3月		
<p>本研究の目的は、英領期のインドにおける受刑者処遇制度の変化の過程を明らかにすることにある。インドの首都デリーにある発展途上社会研究所 (Centre for the Study of Developing Societies) に籍を置いて、1年半にわたり研究に従事した。</p> <h2>1. 現地調査の内容</h2> <p>現地調査は、文献学的な資料調査がその中心的作業となった。調査地は、植民地期以来のインドの中央政府の公文書を保管する国立公文書館のあるデリー、そして北西州／中央州と呼ばれた現ウッタル・プラデーシュ州の州都ラクナウの2都市である。当初、ベンガル管区の資料を調査するためにコルカタの西ベンガル州立公文書館に、そしてハイダラーバード藩王国の資料を調査するためにアーンドラ・プラデーシュ州立公文書館に赴く予定であった。しかし、所蔵文書の状態や報告者の現地語の能力（英語・ウルドゥー語）を考慮した結果、現在のウッタル・プラデーシュ州の州都ラクナウにおいて資料調査を重点的に行なうことが、本研究にとって最も効率がよいと判断した。</p> <p>なお、国立図書館と西ベンガル州立公文書館のあるコルカタ、オリッサ州立公文書館のあるブバネーシュワル、アリーガル・ムスリム大学のあるアリーガルにも文献調査のために短期間の計画で赴いた。</p> <p>本研究を構成する具体的作業は、文献の収集（主にデジタル・カメラを用いた複写）、コード化（TEI [Text Encoding Initiative] 言語による）、および資料の内容分析である。留学の開始当初に予定していたことではなかったが、作業の過程で生成するテキスト・アーカイヴを利用した手法の導入が、近現代を対象とした制度史研究としては特徴的な点であると考えている。</p> <h2>2. 現地調査の成果</h2> <p>以下が留学の主な成果である。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>インド中央政府の監獄関係資料の俯瞰的な見取り図を得る。</li><li>州レベルの監獄関係資料について、現ウッタル・プラデーシュ州の資料を多数収集。</li><li>資料の収集からコード化までの、デジタル・アーカイヴ構築の作業フローを確立。</li><li>国際会議報告および雑誌論文での成果発表。</li></ol>		

上記のうち a と b が文書館における文献調査の直接的な成果である。

どのような制度も、意思決定の単位としてのプレイヤー（本研究では各レベルの行政組織）による、具体的な情報処理過程を通じて変化するものとみなせる。そのため、情報処理の過程で生産された文書に関する事実を明らかにすることが、制度変化についての研究の基礎となる。

英領期以来インドでは、州を単位として受刑者処遇行政が行なわれているが、不定期的に中央政府によって監獄関係の委員会が立ち上げられ、インド全体の制度の標準化が目指されてきた。具体的に制度を運営する州政府と、長期的な制度の標準化を促進する中央政府の間には、その情報処理のありかたに差がみられるものと予想された。そこで、まず中央政府レベルでの資料について調査を行ない、つづいていずれかの州政府（あるいは藩王国）レベルの資料の調査を行なうという方針を立てた。あくまでも制度変化を観察することが目的なので、なんらかの連続性を想定できる資料群に注目した。

#### a. 英領インド中央政府における監獄関係資料の調査

留学開始後の最初の半年間は、主にデリーの国立公文書館において、中央政府関係の資料調査を行なった。中央政府は、例外は多くあるものの、基本的には日常的な監獄の運営には直接関与しないため、定期的な報告書類を生産しない。そこで、相互の参照関係から具体的な時系列的連続性を想定できる資料群として、監獄法の整備に関係する資料と、不定期的に組織された委員会の資料について整理を行ない収集した。これにより、先行研究では体系的に整理されていなかった、インド中央政府の監獄関係資料の俯瞰的な見取り図を得ることができた。

#### b. 北西州／中央州における監獄関係資料の調査

つぎに、州レベルでの資料調査を開始した。2009年3月以来、ラクナウで断続的に資料調査に従事した。ここでは、北西州／中央州（現ウッタル・プラデーシュ州）の資料を約1世紀分（1860-1960年）収集することができた。同州の文書館に所蔵されている監獄関係の現地語資料の多くは、英領期においてはウルドゥー語であったため、新たな言語を学ぶ必要がなかったという意味でも効率的であった。ここでは、1860年から約100年分の監獄局年次報告書、そして同期間の監獄規則集をデジタル画像化することができた。

#### c. 資料のテキスト化およびコード化

上記の資料収集は主にデジタル・カメラを用いて複写するという方法で行なったが、資料の厳密な内容分析のためにデジタル画像を全文テキスト・ファイル化する必要が生じた。留学期間の最後の半年の間に、デリーに研究協力者を得てテキスト・アーカイヴ構築のための作業フローを確立し、現在コード化プロジェクトを継続中である。単に画像ファイルをテキスト・ファイル化するだけでなく、独自のXMLタグ・セットを用いたコード化を行っており、最終的にはTEI言語でタグ付けされたテキストへ変換することをねらいとしている。TEI言語は、電子テキスト作成のための、人文諸科学での事実上の標準となっているものである。

このプロジェクトは現在進行中であるが、基本的な作業フローを確立できたことは、留学の大きな成果である。テキスト化の作業について、OCR ソフトウェアにつきものの誤認識を修正するために大きな費用がかかることが一般的に知られている。留学中に小規模ながら低コストかつ効率的なプロジェクトを立ちあげることができたことは、方法的・技術的に大きな意義を持つと考えている。同プロジェクトは、インドの受刑者処遇制度だけに限定するのではなく、より一般的な視野のもとアーカイヴ構築を目指すものへと発展させる計画である。

#### d. 国際会議および雑誌での成果発表

2009年9月11日にデリーのインド国際センターにおいて、「Asian Trajectories (アジアの軌跡)」と題した国際会議が、報告者の所属先機関である発展途上社会研究所の主催で行なわれた。この会議において、「Evolution of reformative treatments (矯正的処遇の進化)」として成果の一部を報告する機会に恵まれた。この報告を発展させた議論は、雑誌論文として出版予定である。

上記のような留学の成果の意義は、個別の文脈では英領インドの受刑者処遇制度の変化を考察するための、文献学的な基礎的事実の解明という点に見出すことができる。また、より広い文脈では、アーカイヴ構築プロジェクトの運営方法の開発という点に意義があると考えている。

### 3. 今後の課題

近現代史の研究において、今後のデジタル・アーカイヴ構築とその制度設計が避けて通れない大きな課題であることについては、論を要さないように思う。本留学の期間中に取り組んだ、資料のデジタル化～テキスト化～コード化の作業プロセスを発展させ、多様な文書に応用することにより、制度史研究と情報学を架橋する研究手法の開発に取り組んでいきたい。

なお、留学中に開始し現在進行中のプロジェクトは、ProjectScriptorium というプロジェクト名のもと、紙媒体資料の複写から TEI 言語によるコード化までを進めている。処理済みのテキストの公開方法については現在検討中であるが、今後ウェブ上での情報の公開・共有を進めていく予定である。

現在 ProjectScriptorium では、英語と日本語、南アジアのいくつかの言語（ヒンディー語・ウルドゥー語・マラーラム語・タミル語）などのテキスト処理に対応しており、今後対応言語を増やしていく予定である。本プロジェクトの連絡先は次のとおりである。

[projectscriptorium@gmail.com](mailto:projectscriptorium@gmail.com)

#### 4. 留学全般に関する感想

2008年10月から2010年3月末日までの1年半のあいだ、松下国際財団の奨学生としてインドで留学生活を送ることができた。留学開始直前まで研究ビザの取得に時間がかかり、所属先機関（当初はデリーのジャワハルラール・ネルー大学に留学希望であった）や出発日時の変更のお願いを快諾していただいた財団と、諸手続きをお助けいただいた事務局の方々のご好意がなければ、この研究は不可能であった。また、日本学術振興会特別研究員の採用に伴い、留学期間を短縮することもお許しいただいた。

留学先では、受け入れ機関であるデリーの発展途上社会研究所、同じくデリーにある国立公文書館、ラクナウの文書館と監獄局のスタッフの方々にたいへんお世話になった。

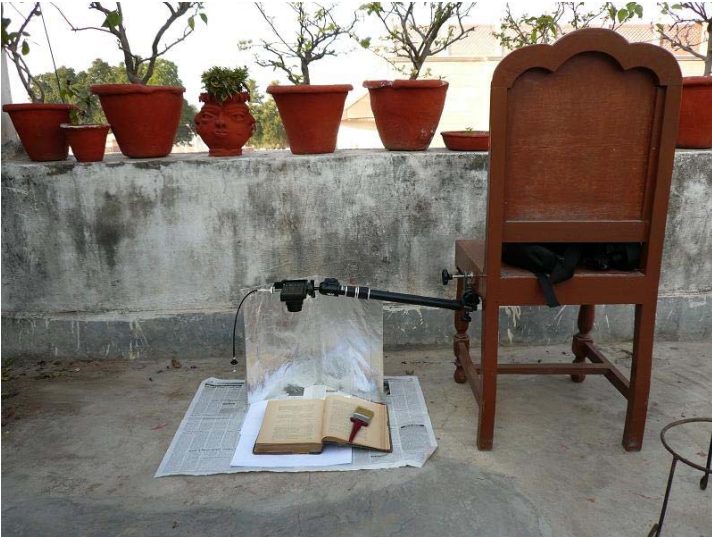
振り返ると留学当初は、国立公文書館で予想以上に膨大な資料群の山を前にして、それをどのように処理すべきかとまどい、半ば呆然としながらとにかく文書館通いをするという日々がつづいた。しかし、手作業でキーボードを打って資料を書き写すというルーチンをつづけるわたしの目の前では、インドのIT環境が非常なスピードで変化しつづけていた。あまりものスピード感のギャップにあせりとまどいを感じずにはいられなかったことをよく覚えている。

少なくともインドの監獄関係の資料に関して、すべてオンラインで検索できるような世界を見てみたいという、なかばSF小説じみた欲望がわたしの中で育てていたのはこの時期であった。もちろん、わたしたちはそのようなアーカイヴをまだ持っていないし、この先いつ実現できるようになるかもわからない。オンライン・アーカイヴの最大手のグーグルやインターネット・アーカイヴでさえ、そのテキスト・データは機械認識されたものが大部分で、誤認識を排除できていないため学術目的で使えるような「完全さ」は持ち合わせていない。また、オープンな試みであるプロジェクト・ゲーテンベルグなども厳密性の問題が指摘されている。しかし、もしわたしたちの世界がそうしたアーカイヴをまだ持っていないのであれば作りはじめればよい。日本より機材を取り寄せてデジタル複写を開始し、コードについて学びはじめたのが、酷暑期のラクナウに通いはじめた2009年5月あたりのことであった。

同年の9月にデリーの国際会議で報告した際に研究協力者を得ることができ、その後ProjectScriptriumを開始した。「スクリプトリウム」とは、印刷技術が発明される以前からヨーロッパの修道院などに付設されていた写字室のことである。そこでは写字生によって聖書その他の文書が手作業でコピーされていた。ProjectScriptriumは、現代の写字室のひとつたらしめとして実験的に開始したものである。予想したよりも良いパフォーマンスで動きはじめており、わたしたちはインドの監獄関係の資料すべてをコード化するという当初の目標を超えて、存在するすべての文書を検索可能なものにするという、多少陳腐ではあるがより大きな夢を見はじめるようになっている。

最後になりましたが、わたしの人生にはかり知れない影響を与えることになった、インド留学の機会を与えてくださった松下国際財団とその事務局の方々、そして審査員の先生方に対して、心からの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。この留学中の経験は、わたしの研究人生の今後すべての時間をどのように過ごすか決定づけるものとなりました。松下国際財団に与えていただいたこの機会なしでは、わたしは「脱皮」することができなかつたと考えています。

たいへんありがとうございました。



屋上での作業風景 [2010年2月、ラクナウ（ウッタル・プラデーシュ州）]



ベンガルの人力車夫 [2009年2月、コルカタ（西ベンガル州）]



お茶屋さん、1杯3ルピー（約6円） [2009年1月、アリーガル（ウッタル・プラデーシュ州）]



ラクダのいる海岸 [2010年1月、プリー (オリッサ州)]



「汚きもの撒き散らすは動物のなせる業、われら人間だもの」の注意書き前にて  
[2009年8月、ラクナウ (ウツタル・プラデーシュ州)]

(Panasonic DMC-FX100 使用)